

# 眞生

第七卷 九月號

□私は八月の唐澤の別時を終へて、間もなく此の地、澁の山寺に來た。晝夜山川を友とした全くの別世界であります。

□かうして、今までの毎月の傳道を悉く中止して、來るべき私の前途へ、全力を注ぐことのできるのは、正に未だ嘗て味つたことのない自由の生活であります。

□十年一日の如く願つて止まなかつたこの私の事業が、愈々之から着手せられると云ふことは、私にとつては實に此の上もない望みと喜びと力との生活であります。

□乍然、これを以つて、私の生活は終るのではありません。之はたゞ、之からの私の理想、實現の第一歩に過ぎぬのであります。

□かくて、今日の私は今や十年來の傳道生活を一時中止して、靜に自らの勉學と著述とに其の全力を注ぐ身になりました。如來を中心とする私の生活は愈々之からであります。

□幸に私の一家も今は無事です。又、私の道友も二三を除いては皆無事であります。願くは此の秋を以つて、私は如來を中心とした眞實の生活に自らを生かしませう。

□今や、眞夏の盛りも過ぎて初秋の夜永の燈下親むべき時となりました。遊ぶにも、働くにも之からが絶好の時であります。

□願くは友よ、またと還らぬ人生の一日である。共俱に好く遊びよく働らかうではありませんか。我なつかしき法の友人よ、私は今かうして、遙に諸君のなつかしき御姿を思ひ出して、其の安康と精進とを祈つています。

□而もかうして、諸君を祈ることのできる幸福は涙なくしては喜ばれない。私の喜びであります。願くは友よ、至幸なれ！ (念)

# 生]の世の界

## 目次

『生の世界』

魁子

全国の道友

諸彦に告ぐ

土屋觀道

禪勝房

中村神羽

唐澤念佛會

に就て

土屋觀道

吾朋便り

唐澤念佛三昧結衆芳名

▽私は此頃ある家に御厄介になつてゐて、一番氣になつた事は、お飯をたべるのでも、餅、壽し、西瓜を貰つて喰べる時でも、皆が一度も佛様に献げるといふことなく、ムサ／＼と喰ふことでした。

▽なんだか喰べてゐる人の顔を見ると、皆餓鬼か悪鬼のやうに思へてなりません。浅間しいことです。何にも如來さまに御初穂を一つ二つ献げるとは、それ程尊い事でないかも知れませぬ。而し餅一つが口へ這入るのも、皆如來さまの御蔭であります。一椀一汁で口を濡らし、壽命を永らへさして戴いてゐるのも皆如來さまからのお恵みであります。

▽それを念へば、その悦びにもその一つ二つは献げずには居れませぬ。一体私達は如來さまの爲めに、これだけのお金を捧げてゐるでせう。随分口腹のためには五圓、十圓を惜みなく、はたひて居り乍ら、線香一本も碌々買つたことがあります。直接如來さまの御供養にせなくとも、有要な途に、價値ある費ひをこれだけしてゐるでせう。恥かしいことです。

▽私初め、如來さまの事に十錢、廿錢を惜しんでゐて愧かしい事ですかといふて又一面には此の生命を、いつ召されても惜しくない氣もいたします。如來さまの世へ、如來様の力を出して貰つて、如來様の事をさして貰つてゐる以上、如來様の道に全分盡さしてもらひたいものであります。(魁)

□今迄大きな椽の木に確かりと、とまつてゐた蟬が、ポトンと墮ちて來ました。ア、可哀さうに、今の今迄樂しく息をしてゐたのが、最早地上の骸となつてゐます。

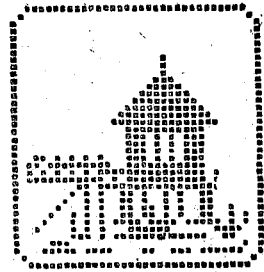
□然し死んだからとて、それがこれだけの損でせう、生きてゐたからとて、それがこれだけの得でせう、死んでも生きても、共に如來さまのふところの裡に呼吸してゐるのです。死ねば死んだで、死の世界へ生長して行てゐます。此の生の世界ばかりが所謂「生の世界」ではありません。あらゆる世界悉くが如來さまの「生の世界」であります。

□それを思へば、そう細かい事を氣にする必要もありません。金があつても金が無くとも、これだけの相異です、幸福でも不幸でも、これだけの相異です。損しても得してもこれだけの損です。これだけの得です。念ひ來つて見ると大抵平均して居ります、これを不平均に見るのは自分の短見からであります。

□私は自分の鈍なからでもありませうが此頃さう斯んな事を苦にせぬやうになりました。そして息盡くまで精一杯やらう——といふ心が差して來ました、そしてコツ／＼やる、目立つても目立たぬでもほめられても、ほめられぬでもやる——。そして停まれば止まつた處が最後で、無事幕を閉ぢる——といふ氣がします。だから安心で、元氣が出て、面白く暮れてゆきます。

□生だ、死だなんと考へてゐるのは、生死の外に居る時の事で、生死——の中に居る時は、そんな事を考へてゐることも出來ません、考へてゐることが出來ぬ位、生になつてゐるのでなければ、本當の生ではありません。私は生といふものを知りません。生といふものを掴みません。然し「生」にはなつてゐると思ひます。

□生とは信であります。信とは生であります。信とは「進み」であり、「流れ」であります。停滞なく一貫の道を進むことでもあります。如來さまは無限の軌道であります。無限の軌道の上を無限に導かれることが「信」であります。私達は無限の軌道が見出されてゐますか、無限に導いて下さる力を、實際感じてゐますか。(魁子)



# 全國の道友諸彦に告ぐ

(私の傳道中止に就て)

土 屋 觀 道

○今後暫くの間、私は一切の傳道講演を中止することにいたしました。

○それは、今暫くの間、私の書き度いものを書くが爲であります。尤もその中には今少しく、讀書したり思案したりしたいものもあります。

○けれども、それは皆、私の信するところのものを後世の爲めに残さんが爲めであります。

○かう申しますと、大へんに大けさにも考へられ又多くの世の人達は是れを誤解して後世の爲めなりといへばえらばつて云ふかにも聞えませう。

乍然 それは私の本意ではありません。

○それはたゞ、私の信するまゝの大略を記して、後の世の人の爲めにもと思ふ單なる私の老婆心に過ぎぬのであります。

○それは私のえらさを傳へんが爲めではなくて、私の如き愚かなもの、罪深いものまでが皆救はるゝ法の尊さを傳へて、後人の爲めにするのであります。

○一体私の傳へやうとするの道は私自身の体験の道ではありますが、それがまた、眞に先人の道であり、又特に今後來るべき人類の道であると信するものであります。

○このことは己に私の入信以來、二十年の昔から信じ來つたところのものであります。其の後時を経るに従つて益その信を確くするものであります。

○尤も此のこの確信は入信以來寸毫も變らないところのものではありますが、其の後幾多の先覺の教へにより可なりに多くの學ぶものゝあつたことも事實であります。

○乍然、それにもかゝらず、私の通つて來た道がそれらの先覺によつて誤まつてゐたと云ふことを教へられるのではなく、寧ろそれらの教へによつて、私の信仰の益眞なるを覺ゆるに至つたのであります。

○謂換れば之等の先覺の教へが深く私を開發したことも確であります。それと同時に私の信するところが又益眞なるものであるといふことを之等の先覺によつて、私の前にそれを證明してくれたかの感さへするのであります。

○而も此の点に於て、最も私の心に合致するものは法然上人の信仰であります。阿彌陀佛を中心と

して釋尊の如く生きるの教へが即ち法然上人の宗教であります。

○私は之を如來中心主義とも稱えて居りますが、近代に於ては辨榮上人の教へが之でありました。其の他、私の師匠中島觀瑠老師の教も、其の人格と共に私の生活に可なりに大きな影響を與へてゐることも亦確であります。

○その他、私の生活、信仰には古來幾多の偉人の生活が見ず知らずの中に深く影響してゐることも自ら認めざるを得ないのであります。その中でも釋迦、孔子、クリストの深き人格と其の教へとは可なりに私を教導したものが多のであります。○その他、親鸞上人の信仰や、道元禪師の言行が私の信仰に可なりの響きを以つてゐることも否むことができません。その他傳教、弘法、日蓮の三師の如きも多かれ少かれ私の生活に關係なしとは云へぬのであります。

二

○然らば私の信仰のすべては殆ど之等の偉人先覺に

三

よつて開發せられたものであると云つてもよいのであります。従つて、此の外に私の云ふべき信仰はないかも知れません。

○従つて、それらの点から云へば己に私如きものは私の信仰など之を後世に傳ゆるの必要もないかも知れぬのであります。

○乍然それにもかゝらず、尙私が之を後世に傳へて千古に知己を求むる人の爲めにしやうとするものは、そこに又、私ならでは傳へることのできぬものを持つからと自ら信ずるものがあるからであります。

○之私が今日まで十年一日の如く自ら信じ自ら傳へて止まぬものがある所以でありまして、私が衷心から止めんとして止めることのできぬものであります。

○然に幸にも世運の然らしむる所か、今日の社會は私共の云ふ所を入れる時代となりました。従て私の信するところは、正に多くの現代の青年、或は有識階級の人々にも其の多くの共鳴者を得るやうになりました。

○之主として、私が喜びに堪えざるところ、それに近頃の社會の思想險惡を告ぐるとき、此のことあらば全く自ら立たざるを得ないところであります。

○乍然私共の理想實現は未だその千万分の一にも達してゐないのであります。

○否、それどころか、ともすれば私共の前途には更に大なる自覺と努力とを要するもの、甚だ多いものさへ感ずるのであります。

○殊に道を説くことのみならず、又各地に傳道を試むることのあまりに多き爲め、一方、自己の勉學と修養に志す其の時がないのであります。又道を聞く人のあまりに多き爲め、靜に人生の行路を深く反省、省察するの期を逸する嫌いさへあつたのであります。

○その他、今後の社會に於ていかに私共の信仰を一般の同胞に傳えるかは更に大いに考察を要するものがあります。

○それに就ては少くとも、こゝに私共の思想信仰の概略をまとめて多くの人の其の道を求むるの便

に供することはこの際尤も必要であると思ふのであります。

○其他、今若し私に若もの不幸があつて、其の死を來すやうなことがありましては、折角今までの私の研究と、思想信仰の大略とは全く後世に傳へることができぬのであつて、一面之ほど私に於て残念なことはないのであります。

○殊に私に於ても、年々に歳をとり、日夜に暮れ行く人生の一生を眺め來るとき、今日強健有力の時、深く之を反省して今までの信仰の主要を筆にすることは今後の私の一生に於て決して捨つべき事ではないかと思ふのであります。

## 三

○其他、實を云へば今日の私には決して、今日で満足してゐるものではありません。否寧ろ今日の私には昔にもまして幾多研學の必要も感じてゐます。或は讀書に、或は思案に、其他支那、印度にも一度はまいつて見たいとの念願に燃えてゐるものがあるのであります。

○否、それどころか、更に若もできることならば一度は歐米の天地にも自ら旅をして見たくてならぬものもあるのであります。

○乍然、之も單に氣まぐれでさう思ふのではありません。凡そこのことを氣にするのは少くとも十數年來のことでありまして、一朝一夕の願ひではないのであります。

○然に之等のことが、かくも永年希念し止まざる私にできずして、反て私共より年若な多くの人たちに先んべられて、或は支那に、或は印度に、其他歐米に行かれることは私にとつては残念な心もします。

○乍然、それにもかゝらず、私があえてそれを爲さぬのは決して、之を遂行する金がないからばかりではありません。それは更にそれよりも大なる私への使命があつたからであります。

○それは支那行きも結構です、印度行きもよいことです。其他歐米見學大切なことであります。乍然それにもまして、人生の眞意義を此の世に傳へることは更に重大なるものであることを知つた

からでありました。

○私が今日まで、少くとも全心をこゝにさゝげて十年一日の如く如來の慈光を宣傳して止まぬものは此の世の何ものにも代えることのできない自己の使命を知つたからでありました。

○自ら道を求めることの大切なことは云ふまでもありません。乍然一度如來の慈光に救はれた眞人の生活には己に自らの生命は問題でありません。そこには更にそれにもまして重大なるは實に此の慈光宣傳の道であるのであります。

○この故に私の生活を反省すれば信前の生活と信後の生活とは全く異つた生活であります。何れを信前の生活といひ、何れを信後の生活と云ふかは暫く別として、

○少くとも求道入信の時代と修道体现の生活とは之を大に區別することができるのであります。此の意味に於て、私の求道の時代は之を支那や印度や、又歐米に於て求め得べきものではありませんでした。従つてそれらに行く可き必要もなかつたのであります。

○そして、又此の道を宣傳する上に於ても、私の今日のところでは、之を日本以外、未だ支那、印度、更に歐米にも行く必要を感じないのであります。

○否、それどころか、私には此の自らの修養と此の道の宣傳の爲めに、彼の地に行くことは自らを害するものさへ思つたのであります。それは一体何故でありませう。

#### 四

○それは云ふまでもなく、此の道を説くことが彼の地に行くことよりも更に此の地に於て有効であるからでありました。加之、若も彼地に行くことによつて私が死ぬることにもならば折角の私が無意義となるからであります。

○而もそれは決して私の死そのものを厭ふからの上ではありません。たゞ偏へに如來の大法の中絶を恐るゝが爲めでありました。

○乍然、それにもかゝらず、私の心にはやはり支那、印度、歐米の天地を一週したい心が止まぬ

ものがあります。それはいかに如來の大慈に生くればとて、否、むしろそれに生くればこそ、一度は世界の大勢をも見て、そこに自ら得るところを多からしめやうとするのであります。

○乍然それにして、今までの私の信仰、謂換へれば一生を通じて、眞に叫ばんとする私の信仰、即ち如來中心の眞生主義は之を永劫に斷絶したくないのであります。

○否、それどころか、むしろ此の眞生の眞意義を更に一層強く深く之を末代に傳えたいと思へばこそ、支那にも印度にも、又延ては歐米にも行つて見たいと思ふのに、このまゝで彼地に行つて若もことがあつてはそれのみを心配するのであります。

○茲に於て、私の考へは先づ暫く一時各地の傳導を中止してどこかで自分の主義信仰の思想内容を著述することである。そして、いつ死んでも、悔いなきやうのものを二三著はして、それから自分の思ふ方面へ更に出発することが最も大切であると思ふやうになつたのであります。

○其他、かうしてさへ置けば、いつ内地に居つて、不慮の災難に出會することがよしありまして、先づ安心と云ふものである。

○もとより、充分のものや大部のものに至つては之は又特に一生を通じての問題であり、決して一時一朝にして出きあがるものではありませんが、それにしても、こゝに私の一大轉回として、此の實際一時各地の傳導を中止して、其の著述に専心かゝると云ふことは決して無意義なることで有ると思へぬであります。

#### 五

○それについては、可なりに早くから私の心にはそれが豫期せられてゐたのであります。

○乍然若し一時でも傳導を中止することゝなれば折角これまで進んで來た我道友の集りがどうなるか、それが一つの心配でありました。

○従つてその爲めには又一方ならぬ苦心が私の心にあつたのであります。それは少くとも私も共に道を歩むものゝ前途に於て、かうして道の進展が

閉塞されると云ふことは私自身に於て、私自身の今までの努力が台無しになるばかりではなく、折角こゝまで進んで来た道友の方々と別れるのが非常につらかつたが爲めでありました。

○又折角こゝまで来た道友の信仰を一止でも中絶することを非常に恐れたからでありました。

○だから、願くばかうした障りの無いやうな方法はなからうか、若しあるとしたらどんな風にすべきであるかと、それは毎月の出張を隔月にしたらどうか。それとも、年に何回かにしたらどうか。或はまた、朝だけを筆とることにして、午後だけを傳導にしたらどうかなども考へたり、相談したり、又或る点までは實行もして見ました。

○けれども、それも仲々にそれは實行難でありまして、可なり苦心したものであります。それでも今年になつてからは殆ど毎月のごころは隔月にして頂きました。

○乍然、新なるヶ所がまたそれからそれへと出来る爲めに、また、私の時間はなくなつてしまふの

でありました。

○こんなことは初めから断ればよいことですが、そこが私の力の弱いところか、どうも頼まれるといやと云へないたちですから、特に傳道のごころに於てはかうなつてしまふのでありました。

○従つてこゝに最も氣の毒なのは、私の忙しさを知つて、同情し、暇の時でよいからと云つて頂くごころは、いつしが行かぬやうになり、度々請はれるごころにはいつしか度々行く爲めに、従前からの親しい道友にも遂に永らく會へないと云ふやうになつたことです。

○従て或るごころでは私のこの事情を知らないで他の所にばかり度々行つて、自分たちの所にはめつたに來ないごころへ誤解せられたやうな所があつたことです。

○乍然それは以上のやうな事状によるのであつて決して他意あつてのことでないのですから、若しさう云ふごころの人がありましたら、どうか私の心を察して、許して頂き度い。

## 六

○然に今度、唐澤の三味會に於て道友たちの勧めによつて一時各地の傳道を中止して、私の信する眞生主義を著述してくれとの願ひに接しました。

○あまりに突然のごころは云へ、かねてから私の常に口にしてゐたごころではあるし、夢かごぼかりにそれを喜んだ次第であります。

○それについては今後の道友の覺悟も入ることだし、又改めて今までの道友先輩の方々にも唐澤に見えてゐない人達に對してはとくと御了解も得なければならぬと思ひますが、

○何れ一心同体の道友のごころではあり、悪い意味のごころでもない、ごころですから、先づそれらの道友の了解は追て各地の道友の方からその了解を願ふごころにして、一先づ私はそのごころを入れるごころにしたのであります。

○従つて甚だ申わけない事ながら善事は急げて、八月以降の各地豫約の傳道も若し出来るものならば此の際一切を廢止するごころにしたいと願つたの

でありました。

○つきましては、私の前途は今暫く全身全意を著述の方面に向けることになりませう。従つて私の生活はもとより著述以外にも又色々の事件も起るごころでありませうが、それはまた止むないごころして、其の他の生活の一切は之から主としてその方に向きたいと願つていいます。

○就ては私の心からなる敬愛の道友諸君よ、願くば此の私の限りなき心からなる眞實の願ひをどうか恙なく無事に果し得ますやうに、一切を善意に解して私の事業を援けて下さい。

○それは決して單なる私の一人の爲めではなくして、之は亦全人類の幸福の爲めにまたなき如來の大悲宣傳を此の世に完ふし得ますやうに。

○今や時は九月の初めに入り、燈下親むべき候となりかけました。而も私の身心は殆ど近年にない健康の状態であります。

○そして亦、私の一家も家内を始め子供三人共、何れも健康で無事であります。さうして心から私の妻は此度の事業を衷心から喜んでゐてくれて居

ります。

○私も歳已に四十二才となりました。今年の二月

から、そのときはまた、氣の向くまゝに出浮いてまわります。

には長子光道が生れ、今年の秋には 今上陛下の

○或は漂然として山川に遊ぶこともありませう。

御即位の大禮があらうとしてゐます。此の際に於

或は讀書し、或は旅行することも、もとよりある

て私自身には殆ど又とない、私一生に於ける人生

ことゝ存じます。

の一大轉換があらうとしてゐます。それはまた何

○願くば私の親愛なる道友諸彦よ、私の到らぬと

と云ふ實に恵まれたる私の今日でありませう。

ころの數々は之を許して、すべてを供俱に昔のま

○でも、人間の力に、さう朝から晩まで著述にば

の道友として、今後とも御一緒に行くことを願ひ

かり、筆をとることもできないことでありませう

ます。——(三、九、一、信州澁、温泉寺二階)

### 禪 勝 房 (中ノ二)

中 村 神 羽

禪勝房は無碍の道心者であつた。

でも信心堅固の譽れ高く、上人も亦

だから學問よりも信仰へ信仰へとま

た殊に可愛がつていらつしやつた。

つしぐらに精進したのである。隨つ

全く眞面目なあれでも高聲出して笑

て此頃は明るい道がすると開け

ふ事があるか知らず危やぶまれる程

て、氣分もゆつたりし心も本當に落

眞面目な御念佛し乍らもデツと小首

着いて來た。上人給仕の御弟子の中

を傾け乍ら考へ込む様な恰好が癖付

いて、見るから本當に道心者らしい道心者であつた。

一條北小路大宮の安居院や近くの

姉小路白河の二階房や、又圓山の長

樂寺や其他上人門侶の中でも有數な

學徳兼備の方々とも往き來して、信

仰を語り合ふ事の出来るのも大きな

喜びの一つで、全く心はのびかに唯

一心に念佛しては自らの幸せを喜

び、喜んで念佛をはげむのであつた。

今日しも師の上人様は月輪禪閣か

らの御使ひで御出ましになり、他の

方々も所用で外出せられて禪勝一人

御留守居をして居た。他には厨屋に

耳の遠い飯炊爺やが居る。斗り。

一人居は靜思によい。禪勝は靜か

に考へる。

「此秋、上人様に御會ひしてから

もう可成になる。而して色々御懇ろ

な御諭しを受けて私の心はスツカリ

變つて仕舞つた。私は先頃迄大變間

違つて居つたのだ。自分の拙なさに

あきたらずして自らを本當に清め而

して自由な解脱の世界に悟入しやう

と斗りあせつて居つたのは畢竟自分

と云ふ小さな計らひが捨て切れなかつた

からなのだ。手や足や首や胴や

の色々の集りが一個の人間を形造つ

て居る様に、法性法身と云ふ大きな

人格が私達の根源として、私達人間

や草木や天地一切の集成から密嚴の

世界に嚴存し給ふ事を知らずし、唯

だ單に此五尺の私を自由にし、唯だ

此一個の私を清めて行かふと念願

して居た事は愚かな事だつたのだ。

法性法身なる宇宙人格の御慈悲が、

光明無量壽命無量の報身如來様と

現はれて居給ふ事を信じて私達の凡

てを捨て、其如來様におまかせし

て居ればよいのに。私は本當に申譯

のない事をして居たのだ。如來様の

お慈悲にすつかり抱かれて居乍ら、

唯だ徒らに悶え苦しんで居たのは本

當にすまない事だつた。南無阿彌陀

佛、南無阿彌陀佛。噫々私は元來が

利己主義の人間なのかも知れない。

本當に如來様に對して申譯もない事

だつた。

禪勝房はやるせなくなつたか、靜

かに立つて本尊様の前にかしこまり

而して再び瞑目し乍ら考へる。

「イヤ今更ら後悔したつて始まり

ない。もう一切を如來様にまかせて

御念佛すればよいのだ。念佛する事

が解脱だつたのだ。念佛して解脱す

るのでなく念佛する事が其儘解脱な

のだ。だが世間では或は社會的存在

としての責任と價值とを考慮しない

で念佛斗りして居るのは一種の社會

罪たと云つて批難すると、一方では

イヤさうではない、生活を念佛に依

つて處理する處に本當の社會的價值

があるので罪惡どころか念佛こそは

社會進歩の原動力だと弁駁する。何

方にしても夫は理窟なので、いづれ

も生死巖頭の問題には遠い事だ。自

分自らの生命も解決せず、我がなす

事が悉く虚偽である。此の現實に深

い反省の眼を向ける時、其處には生

死解脱の問題のみが残されて居るの

を見る。價值だ道徳だと論ずるのは

余裕綽々たる人の間の事で今の私に

は用はないのだ。間違つてるかも知

れないが私はさう思つて居る。自ら

價值ありと氣張つて居るのでは外を  
 鑑つて居るのに過ぎないと。劍術だ  
 つて氣張るのは初心の内だとか云  
 ふ。つまり氣張るのは内容に隙間が  
 あるからだ。外賢善にして内虚偽な  
 る姿なのだ。ヤレ三福だ。ヤレ十三  
 定善だと云つたとてそんな倫理的な  
 難行や冥想的な觀念で如來の本願に  
 相應するかしないか。唯だ念佛の一  
 行でさへ満足に行かないのに、あれ  
 をつまみ、之をつまみして生死解脱  
 の大業が成就し様道理がない。一つ  
 として録な事も出来ない。私の行爲  
 をもし價值として考へる様なら、私  
 は既に我執と我慢とに墮ちたのだと  
 思ふ。イヤ聖教の中にも一切の價值  
 的行善は皆な小善根小福德だと云つ  
 て居るぢやないか。念佛は如來様に  
 皈命する事なのだから氣張ると云ふ  
 事とはスツカリ性質が違ふ。我執我  
 慢のない處、其處に自ら如來の大福  
 徳を肯定する。念佛は即ち大價值で

あり大解脱でもある。何にも氣張る  
 事はいらぬ。そんな必要は更にな  
 いのだ。夫を私は念佛して清くなり  
 念佛して往生すると念佛と解脱とを  
 對立的に考へて居つたからいけな  
 かつたのだ。解脱は因果ではない、因  
 果同時の超論理的な事件なのだ。隨つ  
 て從來考へて居つた行と此の稱名の  
 行とは全く考へ方を別にしてないで  
 分るものではない。倫理的な行爲と信  
 仰的行爲との心的活動が全然異なつ  
 て居ると云ふ事は信仰に入つてから  
 後でなければ味へない事なのだ。も  
 う私は一切を如來様にまかせて御念  
 佛すればよいのだ。私の信心の御念  
 佛が直ちに如來様の御慈悲として私  
 の胸に響く。上人様の云はれた  
 「一念に一度の往生をあてがひて  
 起し玉へる本願」  
 だと云ふことも深い意味は分らな  
 いけれども何だか念佛の中に味へる  
 様な氣がする。心から南無阿彌陀佛

と唱へると汚れた私の心の中に慈悲  
 の種がダイヤモンドの様にピカリと  
 光りを放つて植付かる。何とも例へ  
 様のない暖いのみかな香りが私の暗  
 い心をなごやかに明るくする。南無  
 阿彌陀佛。々々々々々々。全く有難  
 い事だ。人に依つて無論御慈悲の感  
 じに淺深厚薄もあらふし、又さうし  
 た感じさへない倦怠の續く時もあら  
 ふか、如來様の御慈悲の方には何等  
 の變化もない。如來様の光明に曇り  
 がある譯はない。いつも照り輝いて  
 いらつしやるのだ。だから此方の詮  
 議立てはいらぬ事なのだ。  
 嘗て末法燈明記を御引き下すつて  
 「末法の中には持戒も破戒もない  
 のだから淨心妄心の沙汰をしない  
 で唯だ一向に念佛せよ」  
 とおつしやつて  
 「いそぎてもいそぎでも」  
 と繰返し御はげまし下すつたの  
 もやつぱり同じ問題なのだ。……

……だが、自分の様な愚な者は、學  
 問も途中でやめて仕舞つた位で、人  
 様に御話する事も嫌ひだし何も取  
 り柄がないので、國へ皈へつたのち  
 の日暮らしの程も思ひやられる。念  
 佛さへして居ればよいとは云ふもの  
 へまだ何だかシツクリしない点があ  
 るので、昨日も御尋ねして見たら、  
 生らば念佛の功を積み、死なば淨  
 土に参りなん、とても角でも此世  
 には、思ひ煩らふ事ぞなき  
 と四句の今様を御示めし下され、其  
 上。

「念佛の障りになるものは何物も  
 捨て去るがよい。私達念佛者の日  
 常生活は念佛に依つて營まる可き  
 だと思ひますよ。もし一定の住所  
 でやれない事情の人ならば廻國行  
 脚してやつてもよいでせうし、ま  
 た出家では從來の宗旨關係で差支  
 へると云ふならば還俗したつてか  
 まはないと思ひます。また里でい

けないなら山へ、山で退屈するな  
 ら町へ出て同行と大勢でやるのも  
 面白いでせう。少し極端かも知れ  
 ませんが、食ふに困まつて念佛が  
 出来なければ無食も結構ではあり  
 ますまいか。他人から食を受けて  
 は色々遠慮が出ていけないなら勞  
 働し乍らやる可きでせう。妻も子  
 も從類も畢竟は念佛の助けにこそ  
 持つ可きで、もし邪魔になると思  
 ふなら始めから持たないに越した  
 事はありません。所知所領だつて  
 此の通りで何事も念佛の助業にな  
 るなら多きを嫌はず、さまたげに  
 なるのなら少しも執着す可きでは  
 ありません。行く水が淡々として  
 滞る處のない様に、御本願の御稱  
 名が相續せらるゝ處に平安なる日  
 常生活がある斗りなのです。此の  
 からだとても地獄一定の人でさへ  
 貪求して居るのですもの、況して  
 如來の一子として佛の國に生れ様

とする大切な私達ですから之を尊  
 くはぐみ育てるのは當り前では  
 ありませんか。ですから食事をし  
 睡眠をする生活を煩惱生活として  
 悲しく眺めず、極樂へ行く可き資  
 糧として喜ぶたいものだと思ひま  
 す」  
 と、かんでくゝめる様に御さとし下  
 すつたので、上人は正しく我國の御  
 釋迦様だとツクツク有難く感涙にむ  
 せんだ事だつたが本當に自分はまだ  
 念佛になり切れず時々以前の様に自  
 分の機にこだはつて來るので、愚痴  
 が出て困つたものだ。本當に上人様  
 の仰せの様に念佛さへ出来れば何も  
 いらぬのだつた。愚痴をこぼす事  
 もいらす、煩悶苦惱する事もいらぬ  
 なのだつた。  
 だが待てよ。念佛だに申せば、あ  
 とは落花流水何の滞る處もないと云  
 ふ譯にいかぬ事がある。自分は此處  
 へ來てまだ數ヶ月にしかならないけ



度をし初めた様だ。され御燈明でも上げて夕の御念佛でも始めませう。南無阿彌陀佛々々々々々」のさかな様に見えた禪勝房も亦た惱める人だつたのだ。(續)

唐澤別會念佛時

土屋 觀道

毎年のごときはあるが、今年の唐澤別會念佛三昧會は全く近來にない盛況であつた。昨

年に比して参加の人員は少し減つたが、それは一には八月のお前であつたのさ、一には昨年の餘りの大勢であつたのでわざと勧誘をせず中には初めての人々に仰つるさ云ふ意味でわざと差ひがえて頂いた人もあつたからである。 慈を云へばはてない事ではあるが、この分ならば今唐澤の集りは大して悲觀するには足らぬと思ふ。否それどころか、この分で行くならば唐澤の天地は永

.....南無阿彌.....

ウンさうだ。私の様な自分で自分をさうする事も出来ない意志の弱い者は卑怯の様でも自分の事をハッキリ廻りの人々に示さないに限る。値打のない自分が値打ある如く人から思ひをされるのがいけないのだ。近々に遠州へ下らふと思ふがさてさうしたものか.....蓮華寺へ皈へつたのでは知合が澤山あるから駄目だし、云つて山に這入つた處で炭焼や木樵に直ぐ發見されるだらうし、さうした者だらうか..... 禪勝房の思ひは夫れから夫れへと盡くる處を知らない。冬も半ばを過ぎた師走のさむ空。日は早や暮れかゝるにまだ上人様も同宿の人々も御販りにならない。

日暮れでうすら寒くなつたのか身装いし乍ら急に立上がつて。 「上人様もやがては御販へりになるであらう。オ、爺やも夕饗の仕

劫に私共の修養の道場となることであらう。

殊に今年の別時會は初めからしつくりとした念佛であつた。それは道友の限なき修養の結果であることは勿論であるが、又中には私が今后暫く各地の傳道を中止して、著述にかゝるさ云ふことが、可なり強いしげきを興へたかも知れぬ。それは毎月會へると思つて楽しんでゐた人達やまた永久にかうして私共は相友として行けると思つてゐた人たちの心の中に人生の無常甚だ計り難いさ云ふことを通切に感じたからである。

其の他に若い多くの青年や、學校の先生方が可なり眞剣に参加して頂いた点もあるかと思ふ。

毎朝食前に屋外に出て國民体操をやつたのも氣分の轉換と体育の關係上大いによいことの一つであつた。之は昨年もやつたことではあつたが、段々なれて來るだけに都合がよいやうである。

又今年に比して一層家族的であつた。尤も全家族を引きつれたり、夫婦や親子連れの人たちも多かつたが、之は

昨年は多勢であつたので、寢具や、休息も自然と地方別になつた傾きがあつたのに今年はそれがすつかり改造せられて、その爲めに一同が一層一團としてくつろぎを得たやうである。

入湯の方も非常に公平に行つた。さうして總ての上に万事念佛本意の上から、各人の仕事をせられるさゝる、之はいつも乍らの喜びである。

若し慈を云へば毎年缺かしたことの無い、而も世話方の長老達や、中村上人が御子供の御病氣の爲めに來られなかつたことである。

乍然それに引きかへて更に新しき世話方や道友の方々が先輩の跡を引き受けて、細大もらさず全力を注いで頂いたことは之ならばあともつとまるこの歡びに一層の感激の涙をこぼした。

凡そ世の中に人の心の誠ほど有難いものはない。之に反して凡そ世の中に誠なき人の行爲ほど又卑しくも醜いものはない。かつて私の親秀老師は凡そ人の善悪は其の人の公欲と私欲とに別ると云はれたが、私は一步を進めて「凡そ人の善悪

は其の人の至誠の有無に別る」と云ひたい。

乍然、それに引きかへて、更に新たな世話方や、若き道友の人々が一層之に共力して、先輩の跡を引受けてやつて頂いたさ云ふことは私の喜びの一つであつた。

一概に云へば今年の唐澤は初めからしつくりとした念佛會であつた。そして又、每晚の座談會も近年にない好成绩である。殊に一同が年々遊山氣分を離れて、念佛の生活に入り、眞生の生活に生きやうとするものゝ多くなつたことは最も限らない喜びの一つであつた。(念三、九、二)

吾朋便り

▲行基寺 山田淳應様より

唐澤の御別時盛會に終り引續き温泉に御休養の旨去る廿、廿一日崇徳寺様へ御隨喜して承りいよ／＼兼て御内示の如く總ての傳道を打切り専心著述に没入あら

せらるる旨難有極みに存候、御上人様の御信仰を後世に遺すべく乍然少く御上人様の御話し承る事の出来ぬを遺憾に存候然し眞生を通じて拜謁仕り候、但來年の四月の定期別時會は殊に御願ひ申上置き候、今回御上人の御決意に依り圓心寺、常樂寺、長源寺等の失望、其外一般信者も残念に存候。然し一面には御著述の發表を一日も早く期待致し申候。時稍々秋冷を催し申候、折角御攝生祈念仕り候。

▲岐阜縣 保井忠男様より  
唐澤山に於ては甚だぶしつげな御たづねばかり致しましたが御親切に御導き下さいましてありがたう御座います。私如きものにも彌陀の光明がさしか、つて下さつたと思ふさほんたうに感謝させられます。誠にもつたないことながら時々疑がおこつて困ります。中野先生や淺野先生の御導きをうけまして、少しでも進ませて戴きたいと思ひます。残暑酷しき折柄御身御大切に下ささい。

▲静岡市 粟生來治様より  
只今御はがき拜誦いたしました。今後當分傳道御中止の由至極結構と存じます。

傳道も時折轉換して心機一轉せしめる事必要と存じます。一都に遊山氣分の批難ある際新らしき方面又は新進の信者を作る上にも此際の御轉換は甚だ必要と考へます。當分は春夏の大別時位で宜からうと思はれますから文章傳道に御精進を祈ります。尚ラチオなどの傳道も今後は必要と存じますが是れは深甚の用意を以て新らしき眞生主義の要領を短時間に要領宜くする事が必要條件と存じます。現在の放逐者にはあまり香しいのも見當りませんから是非共御願ひたいと思ひます。本年は不順の折柄折角御自愛祈り上げます。合掌。

▲横濱市 熊澤國一様より  
殘暑御伺申上げます。平素は意外の御無沙汰に打過ぎ誠に申譯御座いません。先生には益々御健勝に眞生の宣傳弘道に御精進下さる御事と奉拜察候。先般御男子御安産の由御祝辭をも申述べ失禮の段平に御悔容被成下度候。降而私事御蔭を以て恙なく勤務いたし居り候間俾乍御安心下され度候。小生方去月二十八日男子安産母子共に健在、私の如きものと父と

相成緊難一番せざるを得ず候。日々恵まれし生活を喜ばして頂き居り候。先は殘暑御伺旁々御尊家御一統様の御健康と御多幸とを祈上候。乍末筆御令室様へ宜しく御傳言下され度願上候。

▲名古屋 堀榮二先生より  
入世行路難多しとは常々承知致居候處今回は過重なる受難の如くに存候  
七月十八日に當年四才の男子を如來の御許へ御返し申候とき妻も亦重患にて都合悪しく行くと重れて不幸を見はせんかと思ふ程母性愛深き事を如實に示されたる中母親の慈悲は子に對しては無限で己が身体までも捧げて愛兒の爲努力せし事は永久に消え失せぬ教訓を妻より需め申候  
七月二十四日に妻は黄泉の客となり申候愛兒の事が常に念頭にあつた事を再び承知仕候。

二人を懇に葬儀仕りたるに下女亦病を得次女續いて重患と相成十數晝夜不眠不休に看護仕り候故兩人共昨今平熱に復し再び私の子供として愛撫する事が出来た事を佛に感謝して居ります。此間御上人様始め知己の各位より深き同情を深く感じ

申候。  
將來は愈々信仰に生き亡き靈位に合掌し眞々父として三人の子供の慈父たらん事を念じ居候。

何卒此不幸に直面したる私を御救ひ下さる様御願申上候取込中の事さて御返事も延引の段不悪御許し被下度。唐澤山の神秘の集ひを追想して此書狀を認め申候。殘暑尙甚しく折柄御尊体御大切に御暮被下度先は御禮かたぐ近況報告申上候

▲見附町 今井徳二郎様より  
唐澤山での一週間は私にとつてほんまに思ひ出さなりました。  
御上人 私の信仰は今回の御別時をスタートに再び第一歩から踏み出して御座居ます。今迄の私の信仰は自力の信仰で御座居ました。私の御念佛は何時も價値ある生活を要望しての反省の御念佛で御座居ましたのです。御念佛の中に強く、自己を内省し然して自己の満足出来る生活へ入る可く努力する。それが私の今迄の信仰で御座居ました。處が一度自己の死の問題に到つた時、私には何うする事も出来なくなつたので御座居ます。やる

せない淋しさ悲しさの爲めに身の置き處さへ無かつた位でございます。然るにあの晩御上人の方から感想を述べよその事つひに私の苦しみは口に出たのでございしました。處がああの晩の御上人様の御話しと原様から溢にの懇々なる御教により又御上人の生命觀を見せて頂いてに角眞實の私は宇宙生命より來るものである假令肉體は滅しても眞我は宇宙と共に永遠に生きてゆくものであることを感じさせ

眞生同盟唐澤念佛三昧會結衆芳名

昭和三年八月

- |             |        |            |          |
|-------------|--------|------------|----------|
| 新潟縣 柏崎町 柳橋  | 原 吉郎   | 全 田尻村 宇安田  | 高橋貞四郎    |
| 全 町廣小路町     | 渡邊入右衛門 | 全 南鏡石村 宮ノ下 | 佐藤 忠徳    |
| 全 町岬町       | 後藤甚二郎  |            | 全 宏      |
| 全 町旭町一丁目    | 小熊彌一郎  |            | 全 かつ子    |
| 全 町本町三丁目    | 黒丸 友次  |            | 全 正      |
| 全 町港町二丁目    | 阿部平八郎  |            | 全 進      |
| 全 町岬町       | 市川 喜作  |            | 全 高橋 義   |
| 全 町港町二丁目    | 高橋 幸一  |            | 全 山岸 鷲郎  |
| 全 町本町四丁目    | 新澤 眞吉  |            | 全 小泉 幸四郎 |
| 刈羽郡 高田村 田子屋 | 岩下 祥兒  |            | 全 谷 二三郎  |
|             | 吉田 モエ  |            | 全 今井徳二郎  |
|             |        |            | 全 新岡 爲義  |

